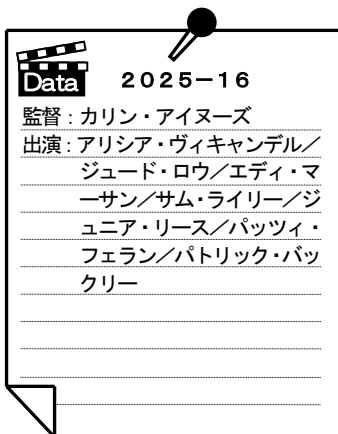




👁️👁️ みどころ

「ファイアーブランド」だけでは何の映画かわからないが、「ヘンリー8 世最後の妻」というサブタイトルを見れば、なるほど、なるほど。しかし、「ファイアーブランド」って一体ナニ? また、リア王やエリザベス女王を知っていても、あなたはヘンリー8 世を知ってる? また、彼の6 番目の妻にして、最後の妻キャサリン・パーを知ってる?

本作を理解するためには、16 世紀のイングランドを支配したテューダー王朝やメアリーVS エリザベス対立の歴史を、さらに、なぜヘンリー8 世がローマ・カトリック教会に反旗を翻して、イングランド国教会を創始したのかを学習する必要がある。

中国でも日本でも王サマには正室の他に側室がいくらかでも認められていたが、「一夫一婦制」を説くキリスト教では、離婚も難しい。しかし、王室継承のためには男児が不可欠。そんな場合、王サマの取るべき道は?

ヘンリー8 世のキャラも面白いが、キャサリンの良妻賢母ぶりに注目! 他方、夫と対立するローマ・カトリック教会を信奉し、聖書を英語訳した本まで立案・執筆・出版した彼女のしたたかさに注目! この知性としたたかさは、薩摩から最後の徳川將軍家に嫁いだ篤姫以上! ?

■□■FIREBRANDとは?ヘンリー8 世とは?最後の妻とは?■□■

本作の原題は『FIREBRAND』だが、この原題だけでは何の映画かさっぱりわからない。そんな原題の映画では、邦題にわかりやすいサブタイトルをつけることが多い。去る 2 月 11 日に観た『ステラ』(23 年) はその典型で、『ステラ』という原題だけでは何の映画かさっぱりわからないが、『ヒトラーに同胞を売った女』というサブタイトルを見れば、同作は

「ヒトラーもの」であることがすぐにわかる。しかし、『FIREBRAND（ファイアーブランド）』とは一体ナニ？

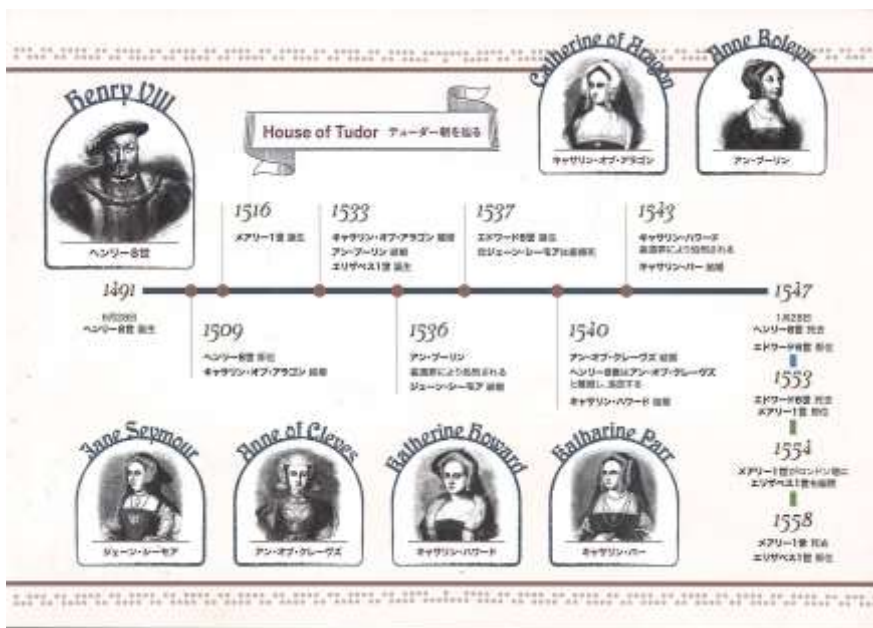
パンフレットに収録されている、久保田祐子氏（翻訳家）の COLUMN「厄介な熱き血潮」によると、「この英単語は『たいまつ、扇動者、火つけ役』などの意味を持つ。ともすれば『厄介者』である。古い書物には『地獄で焼かれる者』というニュアンスすら見受けられたのだとか。“厄介な扇動者”」と解説されている。しかし、そんな英単語だとわかって、なおそんな原題の本作が何の映画かはさっぱりわからない。

しかし、『ヘンリー8 最後の妻』というサブタイトルを読めば、本作はヘンリー8 世とその6 番目にして最後の妻、キャサリン・パーを主人公とした映画だということがわかる。本作でキャサリン・パーを演じたのはアリシア・ヴィキャンデル、またヘンリー8 世を演じたのはジュード・ロウだが、さて、ヘンリー8 世とは？ヘンリー8 世の6 番目かつ最後の妻となったキャサリン・パーとは？

■□■ヘンリー8 世も不知！最後の妻・キャサリンも不知！■□■

日本では徳川幕府が約300 年も続いたが、長く続いた“バラ戦争”に勝利したヘンリー7 世を創始者として、1485 年から始まったイギリスのテューダー朝は、エリザベス女王の時代に絶頂期を迎えたが、同女王の死とともに約120 年後の1603 年に終わりを告げた。本作のサブタイトルとされているヘンリー8 世は、当然ヘンリー7 世の後を継いだイングランド王だが、寡聞にして私は知らなかった。さらに、寡聞にして知らなかったが、ヘンリー8 世とその妻たちの話は日本でも有名で、阿部寛がヘンリーを演じ、吉田鋼太郎が演出を務めた舞台『ヘンリー八世』やミュージカル『SIX』、ヘンリーの妻エリザベス1 世の人生を描く漫画『セシルの女王』などで描かれているようだ。イギリスの歴史（王朝）では、一方ではシェイクスピアのリア王が、他方ではエリザベス女王が有名だが、ヘンリー8 世とはどの時代のイギリスの王なの？

本作のパンフレットには多賀幹子氏（英国王室ジャーナリスト）の REVIEW『ヘンリー8 世の6 人の妻たちが迎えた過酷な運命』（以下「多賀 REVIEW」という）があるので、これは本作を理解する上で必読だ。同 REVIEW によると、ヘンリー8 世の6 人の妻たちの名前は、順に①キャサリン・オブ・アラゴン、②アン・ブーリン、③ジェーン・シーモア、④アン・オブ・クレーヴズ、⑤キャサリン・ハワード、⑥キャサリン・パー。またヘンリー8 世の3 人の子供たちは、①キャサリン・オブ・アラゴンとの間に生まれたメアリー、②アン・ブーリンとの間に生まれたエリザベス、③ジェーン・シーモアとの間に生まれたエドワード6 世の3 人だ。そして6 番目の妻キャサリン・パーは、ヘンリー8 世の先妻たちの3 人の子供たちを心から愛しながら、ヘンリー8 世が戦争に出かけて留守の時は、摂政の役割を果たしていたそうだから、立派なものだが、寡聞にして私は彼女についても全く知らなかった。ちなみに、同 REVIEW の「House of Tudor テューダー朝を辿る」を掲載すれば、以下のとおりだ。



■□■16世紀のイギリスの宗教事情は？宗教対立は？■□■

本作のラストは、あっと驚く想定外の事件(?)が発生し、キャサリン・パーは火炙りの刑に処せられてしまったの?と思ってしまう。しかし、現実にはヘンリー8世の6番目の妻たるキャサリン・パーは火炙りの刑で死亡したわけではない。多賀 REVIEWによると、ヘンリー8世の55歳での死亡を看取ったキャサリン・パーは、4回目の結婚に踏み切り、新しい夫との間の子供を産んだ後、産褥熱により死亡したようだ。

他方、1547年にヘンリー8世が死亡した後、エドワード6世が即位し、1553年にエドワード6世が死亡した後はメアリー1世が即位したが、そこで起きたのが有名なメアリー1世とその異母妹たるエリザベスとの確執だ。この2人の確執の最大の理由は、当時のヨーロッパ最強国たるスペインからヘンリー8世に嫁いできたキャサリン・オブ・アラゴンをもつメアリーは、母親の影響を受けて当然、敬虔なローマ・カトリック教徒だったのに対し、ヘンリー8世と2番目の妻アン・ブーリンとの間に生まれたエリザベスは、離婚を認めないローマ・カトリック教会に反旗を掲げてイングランド国教会を創設したヘンリー8世と同じように、イギリス国教会に忠実な女性だったためだ。エドワード6世亡き後イングランド女王に就いたメアリー女王のプロテスタントへの弾圧は極めて厳しいもので、メアリーは「ブラッディ・メアリー(血まみれの王女)」と恐れられていた。その一端は、『エリザベス: ゴールデン・エイジ』(07年)『シネマ18』174頁)でも興味深く描かれていた。

なお、16世紀のヨーロッパでは、ルター等の登場によって宗教改革の嵐が吹き荒れたが、ヘンリー8世がローマ・カトリック教会に対して反旗を翻したのは、ローマ・カトリック教会が離婚を認めないためだったというからビックリ。そのためにヘンリー8世はイングランド国教会を創始したが、その動機が、もはや男児を生むことが期待できない最初の妻キャサリン・オブ・アラゴンと離婚し、再婚した妻に男児を産んでもらいたい一心のためだったとは、いやはや……。ルターをはじめとする当時の宗教改革におけるさまざまな教義について、ヘンリー8世はどのように考えていたのだろうか？

■一夫一婦制が最大のジャマ！？西欧VS中国・日本■

私は中国のTV歴史ドラマが大好き。春秋戦国時代のそれや、漢民族が支配した唐や宋、明の時代はもとより、異民族が支配したモンゴルや清の時代でも、王様（皇帝）は正妻の他にたくさんの側室を持ち、たくさんの子を持つことが大切なこと、意味のあることとされてきた。徳川時代の「大典」を見れば、それは日本でも同じだ。そして、これを見れば、中国でも日本でも、少なくとも王室においては一夫一婦制が重視されていなかった（無視ないし軽視されてきた）ことは明らかな。

それに対して、ギリシャ・ローマ時代をはじめとする西欧諸国においては、キリスト教が一夫一婦制を強要したため（？）、正確なことはわからないが、宗教上の理由によって、王サマも少なくとも形式的には一夫一婦制が強要されていたらしい。そう考えると、男の子の誕生を望むどの王様がどの程度苦しんだのかは知らないが、男の子の世継ぎが欲しい一心で妻を6人もとっかえひっかえしたヘンリー8世はその典型らしい。また、2人目の妻アン・ブーリンがエリザベスを生んだものの、男の子を生むことに取りつかれたとして、弟や廷臣などとの姦通罪を着せられてロンドン塔に送り込まれ、挙句に斬首されたのは、何とも痛ましい限りだ。アン・ブーリンの悲劇は、姉のアンをナタリー・ポートマンが、妹のメアリー・ブーリンをスカーレット・ヨハンソンが演じた名作『ブーリン家の姉妹』（08年）（『シネマ21』273頁）を観ればよくわかるので、ぜひ本作と合わせて鑑賞されたい。

■良妻賢母にはウソも方便！妻のしたたかさは夫以上！■

本作でキャサリン・パーを演じたのは、『リリーのすべて』（15年）（『シネマ38』43頁）、『エクス・マキナ』（15年）（『シネマ38』189頁）等で、その“美女ぶり”を世界中に見せつけたスウェーデン出身の女優アリシア・ヴィキャンデル。かつてのオードリー・ヘップバーンを彷彿させる（？）彼女が、本作では「ある意味で名君、ある意味で暴君」といえるヘンリー8世の6番目の妻として、一方ではつつがなく良妻賢母ぶりを発揮しているので、それに注目！

本作冒頭に映し出されるのは、遠征に赴いたヘンリー8世に代わり、摂政として国務を預かっているキャサリン・パーが、イングランド国教会と対立するローマ・カトリックの教えを秘密の集会で庶民に演説している、バレれば火炙りの刑に処せられること確実なローマ・カトリック教徒の女性と密かに接点を持つストーリーだ。この女性がキャサリン・

パーと昔から親しい関係者であることはわかるが、冒頭のシーンだけではその詳細は不明だ。しかし、ストーリーが続くにつれて、キャサリン・パーが犯している宗教問題に関するリスクがいかに大きいものかがはつきりと見えてくる。それを知ったヘンリー8世の側近の司教はキャサリン・パーに対してはつきり警告したが、キャサリン・パーはあの布教していた女性と同じく、己の信じる宗教のためなら危険を恐れず、命さえ投げ出す覚悟を示していたからすごい。

ところが、ヘンリー8世が遠征から戻ってくると、夫からの疑惑追求に対して、キャサリン・パーは、「知らぬ存ぜぬ」を押し通したうえ、「夫も先妻の3人の子供たちもみな愛しています」と堂々と語り、現にそのような良妻賢母ぶりを示していたから、これもすごい。ヘンリー8世のしたたかさもすごいが、その6番目の妻として良妻賢母ぶりを示しているキャサリン・パーのしたたかさもすごい。ちなみにNHK大河ドラマ『篤姫』(08年)で見た篤姫の知力としたたかさも相当なものだったが、ヘンリー8世の6番目の妻キャサリン・パーもそれと同じ、いやそれ以上の知性としたたかさに注目！

■聖書の英語訳に挑戦！出版にも！夫との宗教対立は？■

本作の導入部は、前述したとおり、イングランド国教会を創始したヘンリー8世の遠征中は摂政として政務を預かっているキャサリン・パーが、ローマ・カトリックの教えを布教している女性と密かに接触するシークエンスから始まるが、そこでキャサリン・パーは一体何をしているの？そこから徐々にわかってくるのは、ヘンリー8世はローマ・カトリック教会に背いてイングランド国教会を創始し、広めようとしているのに対し、妻のキャサリン・パーは敬虔なローマ・カトリック教会の信者であるため、同じローマ・カトリック教会の信者としてそれを布教している旧友の女性を密かに支援していること。さらに、キャサリン・パーは自分自身も聖書の英語訳を企画し、その執筆と出版に挑戦しているということだ。聖書は膨大な書物だから、それをすべて英語に翻訳するのは大変な作業だが、ホントにそんなことがキャサリン・パーにできるの？

俺の6番目にして最後の妻キャサリンは知性豊かで愛情深く、夫への尊敬の念も、先妻の子供たちへの愛も申し分なし！さらに政治への補佐能力も予想以上だから、これは最高の女房！その上、エドワード1人だけだと思っていたのに、今度は次の男の子まで産んでくれそうだから、さらに申し分なし。キャサリンと結婚して以来、本心からそう思い続けてきたヘンリー8世だが、ひょっとして宗教上、キャサリンが猫をかぶっており、心底ではローマ・カトリック教の信者だとしたら・・・？世界の名優ジュード・ロウが演じるヘンリー8世のそんな苦悩ぶりについても、キャサリンの良妻賢母ぶり同様に注目したい。

本作では、ヘンリー8世とその最後の妻キャサリン・パーとの宗教対立の姿とその克服ぶり(?)に注目し、宗教対立が生む2人の悲劇については、あなた自身の目でしっかりと！

2025(令和7)年2月20日記